

## 技術の進歩と人間

大阪大学工学部 堀川 明

工学研究の多くは、真理の追求というより、むしろ人類社会への貢献を主な目的としている。もっと別のいい方をするならば、人類の欲望の達成の手段を見出すことであるともいえよう。物質文明に対する人間の欲求は止まることがない。工学はそれに追いまくられて日進月歩の躍進を続けている。

しかし、こうした工学による所産がほんとに人類をしあわせにしているのでしょうか。自動車はきわめて非能率的な人間輸送機関であるがこれによってわれわれは真の意味の人間的幸福をどれだけ増進せしめ得たでしょうか。むしろ、その排気、騒音、事故、道路の占有によって人間を破滅へと追いやっているとしたかと思えない。私自身、毎日、この「走る棺おけ」を運転して通学しているけれども、社会の流れには勝つことができない。

化学薬剤による治療が風びしている。「人間はもともと大自然の中に存在する動物の一種でしかない」動物である人間に純粋な薬物を投与してもよいはずがない。人間という動物は複雑な構造をもっており、純粋忌避の性質がある。純水を多量に飲むと、体を構成している物質のあるものが水の中に溶けこんでしまうおそれがある。空気中には炭酸ガスが微量はあるが存在するから呼吸数が安定する。純粋な化学薬品ほど「薬が毒になる」危険性は大きい。血液中には疲労素があるから腎臓が動作するのであって血液中の疲労素を人工じんで完全にとりさって

しまうと本当と腎臓は働かなくなってしまう。

現代の物質文明の隆盛は、まさに革命的である。ところが、人間そのものは大古から少しも変わっていないではないか。源氏物語がいまでも多くの人に読まれて共感を呼び得るとするのは人間の精神構造にほとんど進歩がないということである。すなわち、人間は精神的に太古のままである。物質文明と精神文明とのこの距たりの拡大、これが将来の人類にとって致命的な問題になるだろうことは十分予測される。核装備をするかしないかということも、実は物質文明によってかちえた大きな力を、原始的精神構造しかもたぬ動物である人間が保有しているところに問題がある。ちょうど「気ちがいに刃物」をもたせたのと同じだからである。

私たちはもっと「わたしたちは動物である」ということを自覚しなければならない。物質文明が進めば進むほど、そのことがたいせつである。

天然繊維でできた衣料にまさる合成繊維衣料はまだない。総合性能で評価した場合に、現在最も人間に適した衣服の原料は羊毛であり木綿であり絹である。

鉄と石とプラスチックでできた住宅に閉じこめられると人間は気違いになる。やはり、草と木でできた住居は人間に安らぎを与えてくれる。

冷房装置を通った空気には風の息もない。大自然の微風の気持のよさを再現するにはまだまだほど遠い。現在の冷房装置は曇天の気候を

部屋の中に作っているだけだからである。

丸薬状やチューブ入りの食物は、たとえそれが十分な栄養価をもっていたとしても人間の食物ではない。人間は32本の歯全部を使って海と山のことを味わったとき最も満ちたのである。

人間をより幸福にしようとして開発されたであろうし、また、今後もそれを目標に進められるであろう多くの技術的所産が、別なかたちで

人間をより非人間的にしていることが多い。

人間がすべてお釈迦様の心もち、孔子のように行動したら、人類は滅亡してしまう。動物である人間の幸福理想なんて案外手近かにあるはずである。それをだれもが容易に手に入れることができるような方向に技術の開発が向けられるべきであろう。